

新潟県栄養士大会2026ポスター発表

セッション2

会場：大会議室

発表時間：13:30—14:50

*セッション1と2は同時進行

セッション2：養成校学生、大学院生、研究・教育

- 2-1. 大学生におけるゲーミフィケーションを活用した食行動変容の検討：無作為化比較試験
吉原颯織（新潟医療福祉大学健康栄養学科）、他
- 2-2. 炭酸刺激ととりみ付与が高齢者と若年成人の嚥下動態に及ぼす影響の比較
内野千咲（新潟医療福祉大学健康栄養学科）、他
- 2-3. 米を活用した新たな食育媒体の開発研究
諏佐春華（新潟県立大学大学院健康栄養学研究科）、他
- 2-4. 食の行動変容に向けた健康管理アプリ利活用の在り方の検討
豊田有花莉（新潟県立大学大学院健康栄養学研究科）、他
- 2-5. β -Hydroxy- β -Methylbutyrateによる運動誘発性胃腸症候群の予防効果に関する基礎的検討
太田呼幸（新潟医療福祉大学健康栄養学科）
- 2-6. 大腸癌細胞におけるPMCA4欠損が細胞増殖およびミトコンドリア関連分子に及ぼす影響
渡邊薫子（新潟医療福祉大学健康栄養学科）、他
- 2-7. 自作化学発光イメージング装置を用いたWestern blotting検出系の構築と実用性評価
金井冠太（新潟医療福祉大学健康栄養学科）、他
- 2-8. 自立高齢者を対象にした低栄養の実態とその関連要因～食行動・食意識に着目して～
鈴木一恵（新潟医療福祉大学健康科学部健康栄養学科）、他
- 2-9. 短期的なチアミンの摂取不足が視床下部のチアミン量とAMPK活性に及ぼす影響
佐藤晶子（新潟医療福祉大学健康科学部健康スポーツ学科）、他
- 2-10. 公開オミクスデータを用いた大腸癌におけるATP2B4/PMCA4の発現特性と機能解析
青木 海（新潟医療福祉大学健康栄養学科）
- 2-11. 栄養士学科卒業生の現況と授業科目に対する受け止め方からみた栄養教育の効果
—校外実習を中心として—
鷲頭哲男（新潟国際調理製菓専門学校）

ポスター発表 セッション2(養成校学生、大学院生、研究・教育)

座長: 竹内瑞希、石上和男

P 2-1

学生発表

大学生におけるゲーミフィケーションを活用した食行動変容の検討: 無作為化比較試験

○吉原颯織¹⁾ 森 博康¹⁾

¹⁾ 新潟医療福祉大学健康栄養学科

【目的】近年、ゲームの仕組みを健康支援に活用するゲーミフィケーションが注目されている。大学生は自ら食事を選択する機会が増える一方、朝食欠食や栄養バランスの偏りなど、食生活が乱れやすい時期である。また、健康に関心の低い者に対して健康行動を直接促すだけでは、行動変容につながりにくい可能性がある。そこで本研究では、ゲームを健康行動のきっかけとして利用することに着目し、歩数・食事記録・ゲーム機能等を有するスマートフォン向けアプリケーションの利用が大学生の食行動変容に与える影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】大学生 30 名を対象に無作為化比較試験を実施し、対照群 15 名とスマホ群 15 名に無作為に割り付け、3 か月間介入した。両群に大学生の食生活に関する基本的な食事指導を行い、スマホ群には加えて歩数・食事記録機能を有するゲームアプリを使用してもらった。評価項目はエネルギー・栄養素等摂取量、食事・歩数の記録頻度およびプロチャスカの行動変容段階とした。

【結果】途中離脱者および有害事象はなかった。対象者全体では、スマホ群は対照群と比較して食事管理の行動変容段階および歩数記録頻度、エネルギー、たんぱく質、食物繊維、野菜、魚介類の摂取量に有意な改善を認めた($p<0.05$)。特に無関心期では、これらに加えて食事記録の行動変容段階および食事記録頻度にも有意な改善を認めた($p<0.01$)。一方、関心期では、エネルギーや栄養素、食品群の摂取量および食事管理・食事記録の行動変容段階に群間差を認めなかった。

【結論】ゲームを活用した食事記録は、大学生が食事内容を振り返り、食行動を意識するきっかけとなる可能性が示された。特に無関心期で効果が大きかったことから、健康への関心が低い者には、ゲームなど興味を持ちやすいものを入口として食事記録や歩数記録を取り入れることが、行動変容のきっかけとして有効である可能性が考えられた。

P 2-2

学生発表

炭酸刺激とろみ付与が高齢者と若年成人の嚥下動態に及ぼす影響の比較

○内野千咲¹⁾ 岩淵優花¹⁾ 大谷梨桜¹⁾ 中山茜音¹⁾ 岩森 大¹⁾

¹⁾ 新潟医療福祉大学健康栄養学科

【目的】嚥下障害において、飲料の炭酸化によるアプローチは、嚥下運動を変調させることが報告されている。しかし、高齢者の嚥下筋活動に対しどのように関与しているか具体的に検証した報告は少ない。本研究では、とろみと炭酸が高齢者の嚥下筋活動に及ぼす影響を検討した。

【方法】新潟市在住の高齢者 40 名(71.5 ± 4.3 歳)と若年成人 40 名(25.7 ± 8.9 歳)を対象とした。被験飲料として、炭酸水、1.5%クエン酸炭酸水と各々にとろみを付与した計 4 種類を用いた。各飲料はランダムに 10ml 提供し、舌骨上筋の表面筋電図(EMG)を記録し嚥下運動を評価した。また、摂取直後の感覚について視覚的アナログ尺度(VAS)を用い評価した。統計解析は、飲料ととろみの有無の要因分析として、2 元配置反復測定分散分析ならびに事後検定として Bonferroni 補正後の多重比較、高齢者群と成人群の群間比較には t 検定を行った。

【結果】飲料ととろみの要因分析では、嚥下開始時間、持続時間においてとろみの主効果を認め、事後検定ではとろみ炭酸水は炭酸水に比べ有意に延長された。高齢者と若年成人による比較では、高齢者の筋活動量が有意に増加し、嚥下時間は有意に延長した。また、とろみ付与飲料では高齢者の嚥下開始時間が有意に早くなり、VAS 法による残留感では炭酸水において高齢者が成人より有意に高値を示した。

【結論】高齢者における筋活動量の増加は、炭酸刺激に対する嚥下関連筋の応答を示すと考えられ、とろみ付与による嚥下開始時間の短縮は、口腔内保持や嚥下準備が容易になった可能性を示唆する。炭酸による感覚刺激ととろみ調整は、高齢者の嚥下筋活動および嚥下開始に異なる影響を及ぼし、高齢者の嚥下運動を賦活・調節する可能性が示された。

P 2-3

学生発表

米を活用した新たな食育媒体の開発研究

○諏佐春華¹⁾ 曾根英行¹⁾ 山岸あづみ²⁾

¹⁾ 新潟県立大学大学院健康栄養学研究科 ²⁾ 新潟県立大学こども学科

【目的】米は、日本人の主食であり、多様な食品に加工される基幹食品である。現在、日本では約 300 品種の米が作付けされている。しかし、各都道府県で栽培される代表品種の祖先系統や特性を一般向けに整理した資料は少ない。そのため、品種名は広く知られているが、品種間の違いは十分伝わっておらず、米への興味・関心を喚起する機会が乏しい状況にある。また、近年、家庭での調理機会減少により、子どもの食経験不足が懸念され、保育現場での食育が重要となっている。食育は、科学・技術・工学・芸術・数学の要素を含み、STEAM 教育との親和性が高い。そこで本研究では、米の品種と米からできる食品の基礎資料を作成し、さらにそれらを基に、STEAM 教育の視点を取り入れた幼児向けの食育媒体を開発することを目的とした。

【方法】対象品種は、令和 6 年産うるち米の道府県別作付上位 3 品種と各道府県が紹介する栽培品種、全国農業協同組合連合会が紹介する代表品種を抽出し、重複品種を統合した 168 品種とした。次に、イネ品種データベースに収載されている祖先系統図を用い、父母と祖父母系統の品種を一覧表に整理した。また、米からできる食品は、稲から食品になるまでの加工過程を軸に整理した。さらに、これらを基に、STEAM 教育の視点を取り入れた幼児向けの食育媒体を開発した。

【結果】168 品種の祖先系統を整理した結果、コシヒカリ及びコシヒカリ系統が全国的に広く普及していることが確認された。一方、コシヒカリ系統を持たない品種も確認され、地域条件等に応じた育種が示唆された。また、米からできる食品の整理により、米が稲から食品へと変化するプロセスを視覚的に理解することを可能とした。さらに、これらを組み合わせ、STEAM 教育の視点を取り入れた幼児向けの食育媒体を開発した。

【結論】本研究により、米の品種情報と加工品を整理した基礎資料が作成され、さらに STEAM 教育の視点を取り入れた幼児向け食育媒体が開発された。

P 2-4

学生発表

食の行動変容に向けた健康管理アプリ利活用の在り方の検討

○豊田有花莉¹⁾ 玉浦有紀¹⁾

¹⁾ 新潟県立大学大学院健康栄養学研究科

【目的】健康管理アプリ長期利用者において、食行動に関するアプリの利活用状況と行動変容ステージの関連を自己制御能力や自己効力感を踏まえて検討する。

【方法】2024 年 9 月までに、食事記録アプリ（カロミル®）を 6 ヶ月以上利用した者を対象に、アプリ機能内で実施した web 自記式質問調査を二次利用した。アプリ利活用状況として、食行動のモニタリング（頻度・項目数）・評価（評価項目数・課題項目数）・目標設定（項目数・取り組み内容の決定）をたずねた。食行動の自己制御能力は、「私は、食べたいものでも、我慢するのが得意だ」など 5 項目から成る既存尺度を翻訳して用い、5 件法で回答を得た。アプリ利活用状況と行動変容ステージの関連を χ^2 検定、自己制御能力の合計点 (5.0-25.0) や自己効力感とアプリ利活用状況及び行動変容ステージを Mann-Whitney U 検定または Kruskal-Wallis 検定で検討した。行動変容ステージとアプリ利活用状況、自己制御能力、自己効力感の関連を、属性を踏まえて重回帰分析で検討した。最後に、行動変容ステージに寄与する要因を共分散構造分析で構造モデルを作成し検討した。

【結果】解析対象者 2,014 名の平均年齢は 38.9 歳 (SD=11.4) で、女性が 70.4%であった。行動変容ステージ後半の者は、モニタリング頻度が高く、目標の取り組み内容を決めており、自己制御能力や自己効力感が高かった。重回帰分析において、行動変容ステージへの寄与度は、「モニタリング項目数（多い）」と「取り組み内容の決定（決めている）」で高かったが、自己制御能力や自己効力感を投入するとその程度は減弱した。共分散構造分析より、自己制御能力や自己効力感は、アプリ利活用状況と行動変容ステージの関連を部分媒介していることが示された。

【結論】アプリ利活用におけるモニタリングや目標設定は、自己制御能力や自己効力感を高め、行動変容を促進する可能性がある。

P 2-5

学生発表

β -Hydroxy- β -Methylbutyrate による運動誘発性胃腸症候群の予防効果に関する基礎的検討

○太田呼幸¹⁾

¹⁾ 新潟医療福祉大学健康栄養学科

【目的】運動誘発性胃腸症候群（EIGS）は、運動に伴う消化管血流低下や酸化ストレス等を背景に腸管バリア機能の破綻や消化器症状を引き起こす病態であり、栄養学的介入による予防法の確立が求められている。ロイシンの代謝産物である β -hydroxy- β -methylbutyrate（HMB）は腸管に対する抗酸化作用や組織保護作用を持つ可能性が示唆されているが、EIGS に対する効果は十分に解明されていない。そこで本研究では、HMB による EIGS 予防効果の検証を目的とし、まず急性運動負荷による EIGS モデルを構築して腸管バリア機能および酸化ストレス応答を評価した。

【方法】8 週齢の雄性 ICR マウスを非運動群、低強度運動群（12 m/min、30 分）、高強度運動群（30 m/min、30 分）に分け、一過性トレッドミル運動を負荷した。運動負荷 30 分後に回腸を採取し、腸管バリア機能関連遺伝子（Zo-1、Cldn1、Ocln）および酸化ストレス応答関連遺伝子（Gpx2、Sod2）の mRNA 発現を解析した。さらに、250 mg/kg/日の経口投与による HMB 介入時の腸管バリア機能および酸化ストレス応答への影響についても解析を進めている。

【結果】高強度運動負荷後の回腸において、腸管バリア機能関連遺伝子である Zo-1 および Cldn1 の mRNA 発現が高強度運動群で有意に低下し、Ocln は低下傾向を示した。また、酸化ストレス応答関連遺伝子である Sod2 は高強度運動群で有意に低下し、Gpx2 も低下傾向を示した。低強度運動群ではこれらの低下が認められず、高強度の一過性運動によって腸管バリア機能および酸化ストレス応答に関連する遺伝子発現が低下することが示された。

【結論】高強度の一過性運動負荷により、回腸における腸管バリア機能および酸化ストレス応答関連遺伝子の発現が低下することが明らかとなった。本運動条件は EIGS に対する栄養学的介入の効果を検証するための実験モデルとして有用であると考えられ、現在このモデルを用いて HMB 摂取による EIGS の予防・緩和効果の解析を進めている。

P 2-6

学生発表

大腸癌細胞における PMCA4 欠損が細胞増殖およびミトコンドリア関連分子に及ぼす影響

○渡邊薫子¹⁾ 太田呼幸¹⁾ 青木 海¹⁾

¹⁾ 新潟医療福祉大学健康栄養学科

【目的】Plasma membrane Ca^{2+} -ATPase 4（PMCA4）は細胞質 Ca^{2+} を細胞外へ排出し、細胞内 Ca^{2+} 恒常性を維持する膜タンパク質である。近年、PMCA4 は細胞増殖や細胞死などの制御にも関与することが報告されているが、大腸癌細胞における機能的役割は十分に明らかでない。本研究では、PMCA4 欠損が大腸癌細胞の増殖、細胞形態、増殖関連シグナルおよびミトコンドリア電子伝達系に及ぼす影響を検討した。

【方法】ヒト大腸癌由来 HCT116 細胞の non-targeting gRNA control（Scramble）および独立した 2 つの PMCA4 knockout（KO）クローンをを用いた。各細胞を 5×10^3 cells で播種し、7 日後にコロニー形成能を評価するとともに、細胞形態を観察した。また、 3×10^5 cells で播種し播種 48 時間後にタンパク質を回収し、イムノブロットング法により細胞増殖関連シグナル分子およびミトコンドリア電子伝達系複合体（OXPHOS）の発現を解析した。

【結果】PMCA4 KO 細胞では Scramble 細胞と比較してコロニー形成能が低下し、この変化は独立した 2 つの KO クローンで認められた。また、KO 細胞では細胞形態の変化が観察された。さらに、PMCA4 欠損に伴い増殖関連シグナル分子の発現量およびリン酸化状態が変化し、OXPHOS 関連タンパク質の発現低下が認められた。

【結論】PMCA4 欠損は HCT116 細胞のコロニー形成能を低下させ、細胞形態、増殖関連シグナルおよび OXPHOS 関連タンパク質を変化させた。以上より、PMCA4 は大腸癌細胞の増殖能およびミトコンドリア機能の制御に関与する可能性が示唆された。

P 2-7

学生発表

自作化学発光イメージング装置を用いた Western blotting 検出系の構築と実用性評価

○金井冠太¹⁾ 太田呼幸¹⁾ 渡邊薫子¹⁾ 青木 海¹⁾

¹⁾ 新潟医療福祉大学健康栄養学科

【目的】Western blotting (WB) における化学発光シグナルの撮像には専用イメージング装置が広く用いられるが、導入・更新費用が課題となる。これまで我々はスマートフォンを用いた簡便な化学発光検出法を報告したが、検出感度に課題が残されていた。本研究では、市販の CMOS カメラを基盤とした低コスト化学発光検出系を構築し、WB における検出および定量性能とその実用性を検討した。

【方法】市販の CMOS カメラを用いて化学発光検出系を構築し、外部光を遮断した環境下で長時間露光により WB シグナルを撮像した。培養細胞由来タンパク質を用い、発現量や分子量の異なる細胞内シグナル伝達関連タンパク質および細胞接着関連タンパク質を検出し、得られた画像の定量解析を行った。

【結果】本検出系により、mTOR、p65、p38 などの細胞内シグナル伝達関連タンパク質に加え、それぞれのリン酸化タンパク質を検出できた。また、検出したタンパク質の多くで化学発光シグナルの定量解析が可能であった。一方、発現量が低くシグナルの弱い一部のタンパク質では S/N 比が低下し、十分な定量性を確保できない場合が認められた。

【結論】市販の CMOS カメラを基盤とした低コスト化学発光検出系により、WB における複数のタンパク質およびリン酸化タンパク質の検出・定量が可能であった。一方、低発現タンパク質では検出感度に課題が残された。本検出系は、性能上の限界を明確化することで、日常的な WB 解析に利用可能な低コスト検出法となる可能性が示された。

P 2-8

会員発表

自立高齢者を対象にした低栄養の実態とその関連要因 ～食行動・食意識に着目して～

○鈴木一恵¹⁾ 渡辺優奈²⁾、斎藤トシ子³⁾、石上和男¹⁾

¹⁾ 新潟医療福祉大学 ²⁾ 千葉県立保健医療大学 ³⁾ 新潟大学大学院

【目的】自立高齢者が低栄養に陥らないための対策は健康寿命の延伸や介護予防の観点から重要であるが、低栄養の要因となる食行動や食意識に関する報告は少ない。本研究では、自立高齢者の低栄養の実態を把握し、その要因を食行動や食意識に着目して明らかにすることを目的とした。

【方法】2024 年 5～10 月に新潟県 A 市が実施した後期高齢者健診の対象者に調査票を郵送し、健診会場にて同意が得られた 811 人を対象にした。調査項目は、後期高齢者健診の検査・問診項目、簡易栄養状態評価 (MNA-SF)、食品摂取多様性の得点 (DVS) 及び各食品群、食行動及び食意識に関する 21 項目を用いた。栄養状態は MNA-SF により、「低栄養 (0～7 点)」、「低栄養おそれあり (8～11 点)」、「栄養状態良好 (12～14 点)」とし、低栄養群 (低栄養と低栄養おそれあり) と栄養状態良好群の 2 群とした。従属変数を栄養状態とし、年齢、性別、既往歴、健診結果 (血圧、脂質代謝、貧血、血糖の有所見)、食品群、食行動及び食意識に関する項目を独立変数としてロジステック回帰分析を行った。

【結果】解析対象者は介護保険認定者を除き、情報に欠損がない 754 人で、男性 367 人 (平均年齢 79.4 歳)、女性 387 人 (平均年齢 79.9 歳) であった。栄養状態については「低栄養」6 人 (0.8%)、「低栄養おそれあり」149 人 (19.8%)、「栄養状態良好」599 人 (79.4%) であった。低栄養群と有意に関連した要因は、栄養状態の自己評価 (低栄養) オッズ比 (OR) =3.74、95%信頼区間 (CI) :1.92-7.26、食欲なし OR=5.64、CI:1.91-16.64、体重測定頻度 OR=1.66、CI:1.02-2.70 であった。また、調整因子として投入した既往歴あり OR=2.29、CI:1.33-3.95 など有意な関連が認められた。

【結論】本研究の結果から、低栄養は栄養状態の自己評価や食欲といった食生活関連要因に加え、体重測定頻度という行動要因、さらに既往歴を含む健康状態とも独立して関連していることが示された。

P 2-9

会員発表

短期的なチアミンの摂取不足が視床下部のチアミン量と AMPK 活性に及ぼす影響

○佐藤晶子¹⁾ 佐藤眞治²⁾ 越中敬一³⁾¹⁾ 新潟医療福祉大学健康科学部健康スポーツ学科 ²⁾ 新潟薬科大学応用生命科学部応用生命科学科 ³⁾ 新潟医療福祉大学健康科学部健康栄養学科

【目的】チアミン(ビタミン B1)は糖質代謝の重要な補酵素であるが、その欠乏症状のひとつに食欲不振があり、長期的なチアミンの摂取不足により摂食量の低下が生じることが知られている。またこのとき、食欲調節に関わる視床下部の AMPK 活性が低下することが報告されている。短期的なチアミン摂取不足では通常は食欲不振は見られないが、持久系競技のグリコーゲンローディングや体重階級制競技の計量後の回復期など糖質が大量に体内に流入する局面ではチアミンの相対的な不足が生じ、潜在的な食欲不振の顕在化により摂食が妨げられる可能性がある。そこで本研究では、短期的なチアミン摂取不足時の視床下部のチアミン量と AMPK 活性、さらに同条件における糖質大量摂取が自発的摂食量に与える影響を確認した。

【方法】雄性 Wistar 系ラットを普通食を摂取する CON 群と普通食からチアミンを欠乏させた飼料を摂取する TD 群に分け、それぞれの飼料を水分とともに 1 週間自由摂取させた。その後 24 時間の絶食により食欲を増強させ、チアミンの活性型であるチアミンピロリン酸の視床下部における濃度を液体クロマトグラフィー質量分析により、視床下部の AMPK 活性の指標としてリン酸化をウェスタンブロッティング法により測定した。また同様に絶食させたあと再摂食させた場合の自発的摂食量を確認した。

【結果】視床下部のチアミンピロリン酸濃度は TD 群($2.702 \pm 0.215 \mu\text{g/g}$)が CON 群($3.358 \pm 0.148 \mu\text{g/g}$)よりも有意に低値を示し($p=0.031$)、短期間のチアミン欠乏食の摂取によりチアミン量が低下したことが確認できた。しかしながら AMPK の活性に群間差は認められず、再摂食時の自発的摂食量にも有意差は確認されなかった。

【結論】短期的なチアミン欠乏食の摂取により視床下部のチアミン量は有意に低下したが AMPK の活性と自発的摂食量は維持されており、視床下部のチアミン量の低下がただちに食欲不振を惹起するものではないことが示唆された。

P 2-10

会員発表

公開オミクスデータを用いた大腸癌における ATP2B4/PMCA4 の発現特性と機能解析

○青木 海¹⁾¹⁾ 新潟医療福祉大学健康栄養学科

【目的】Plasma membrane Ca^{2+} -ATPase 4 (PMCA4) は ATP2B4 遺伝子にコードされ、細胞内 Ca^{2+} 恒常性の維持に加え、癌細胞の増殖や遊走、シグナル伝達への関与が報告されている。しかし、大腸癌における臨床病理学的意義は十分に明らかでない。本研究では、公開データを用いた統合バイオインフォマティクス解析により、大腸癌における ATP2B4/PMCA4 の発現特性、予後との関連および関連する生物学的機能を検討した。

【方法】TCGA および CPTAC 由来データを用いて、正常組織と大腸癌組織における ATP2B4 mRNA、PMCA4 タンパク質発現を比較した。KM-plotter を用いて ATP2B4 発現と overall survival (OS) との関連を解析した。さらに、共発現解析および Gene Set Enrichment Analysis (GSEA) により関連する生物学的機能を解析し、GEO の独立コホートを用いて発現変化を検証した。

【結果】大腸癌では ATP2B4 mRNA および PMCA4 タンパク質発現が正常組織と比較して有意に低下し、この変化は早期病変から認められた。独立コホートでも ATP2B4 発現変化が確認された。生存解析では ATP2B4 高発現群で OS 不良となる傾向を認め、一部の臨床病理学的サブグループでは有意差を認めた。また、高発現側では細胞接着・細胞外マトリックス、低発現側ではミトコンドリア機能・酸化的リン酸化関連遺伝子群との関連を認めた。

【結論】大腸癌では ATP2B4/PMCA4 発現が低下する一方、予後との関連は臨床的・分子的背景によって異なる可能性が示された。また、ATP2B4 は細胞接着・細胞外マトリックスおよびミトコンドリア代謝に関連し、大腸癌において文脈依存的な機能を有する可能性が示唆された。

栄養士学科卒業生の現況と授業科目に対する受け止め方からみた栄養教育の効果 ―校外実習を中心として―

○鷲頭哲男¹⁾¹⁾新潟国際調理製菓専門学校

【目的】演者らは、栄養士学科の校外実習で学生の自己評価と施設の評価を比較し、学生の評価が施設の評価より高い比率は35%。当該学生は自分の行動に対する自覚が乏しく、事前の指導を強化する必要性を示した。本研究は、栄養士学科発足以来の卒業生の現況を調べ、校外実習などの履修科目に対する受け止め方（理解できた、好きだった、役立っている科目など）を調査し、学校における栄養教育の効果を検討した。

【方法】個人が特定できないように無記名でアンケート調査を行った。項目は、卒業後就職して離職するまでの年数、離職の理由と転職後の職業、学校での履修科目の理解度、校外実習で役立っていることと後輩へのアドバイスなどである。

【結果】発足時からの卒業生367名中122名から回答を得た。栄養士として就職した人は89%、この間の離職者の勤務年数平均は2.4年であった。特徴は1年以内の離職が23%と多く、異業種への転職が82%であった。入学前から栄養士の仕事を知っていた人は58%いたが、早期離職の原因は仕事がきつい、人間関係、給料が安い、結婚などであった。栄養士のイメージができた科目は給食管理実習、栄養指導論、校外実習などで、現在役立っている科目は給食管理、校外実習など。卒業生は校外実習では厨房での作業の流れなどが有益だったとし、アドバイスは作業の流れを観察する、積極的に質問してメモをとる、挨拶や作業は積極的に行うなどであった。

【結論】卒業生の90%は栄養士で病院、福祉施設などに就職する。アンケートも同じ傾向で、卒業生の動向が推察できる。早期離職者が多いのは全国と同じ傾向で、本人の期待と配属先の業務、待遇などとの乖離が原因であった。卒業生は校外実習に強い印象を持っており、在学生に対する親身なアドバイスが多く、在学生に栄養士の業務全般を理解させる必要性が認められた。